こんな本はいかがでしょうか？　当館学芸員オススメの本

昨今とても話題になることが増えた縄文時代ですが、いざ縄文時代についての本を読んでみようと思っても、どれがいいのかわからない…ということもあると思います。ここ最近はムック本も多く出版されていて、学芸員でさえ、正直そのすべてに目を通していると胸を張って言えないこともあります。

そんな状況ではありますが、当館学芸員が目を通したなかでオススメできる本を簡単に紹介したいと思います。以下の７つのテーマで紹介します。

縄文に関心のある方の参考になればと思います。

1. 今までとはちょっと違う語り口の書籍
2. 縄文時代の主食だったというドングリ等に関心がある
3. 土器や土偶にどんなものがあるのか、ざっと見てみたい
4. 縄文時代について知りたい
5. 縄文時代人について知りたい
6. その他
7. 遺跡や博物館に行きたい!

なお、考古館でこれらの本を読むこともできます。なかには書庫に収めている本もありますので、読みたいという方はお手数でも受付でその旨お知らせください。

1　今までとはちょっと違う語り口の書籍

●『はじめての土偶』（響田亜紀子著、武藤康弘監修、世界文化社、2014 年）

近年、何かと話題にのぼることが増えた土偶。でも、女性像というわりにはデザインがみんな個性的すぎて女性なのか？…いやいや、そもそも人なのか？と思うものもいっぱいあって何だかな…しかも何に使ったかいまいちピンとこない。と感じている方、この本書を手に取ってみてください。ありそうでなかった土偶図鑑と言ってよさそうな本書は、ユニークな土偶の写真満載で、その紹介を見れば今までより親しみを感じるようになれると思います。

●『NORAH season 4: spring2014』（Farmer's Market 編　2014 年）

冒頭の記事「土とは?」で、当館の国宝「土偶」2 体が紹介されています。土偶の紹介に続くページでは、土偶の造形を今の私達から見て感じることが率直につづられた記事も掲載されています。「考古学の本って、敷居が高いし、意を決して読んでみると難しすぎて面白くない」と感じる方、この本は角度も違って面白いと思います。

2　縄文時代の主食だったというドングリ等に関心がある

●『ドングリと文明』（ウィリアム・ブライアント・ローガン著、山下篤子・岸由二訳、日経 BP 社、2008 年）

縄文時代の人々はコナラやミズナラといった木の実、いわゆる「ドングリ」を食料として親しんでいたことが、全国各地の発掘によってわかってきました。そんなドングリが過去地球上のさまざまな地域で、広く活用されてきた事例を紹介している本書を読むと、時にはドングリそのものを食べ、時にはドングリのなる木を木材として利用してきたことがよくわかります。

●『トチ餅は東京産　その味は遥かなる縄文とのきずな』（濱屋悦次著、批評社、2006 年）

今でも内陸部を中心にお土産品としてときおり目にするトチ餅ですが、縄文時代にも食料にされていたことがわかっています。本書では、植物としてのトチ、アク抜きの民俗学、そして縄文時代におけるトチの重要性を述べています。

●『ドングリの謎　拾って、食べて、考えた』（盛口満著、ちくま文庫、2011 年）

ボルネオで念願の世界最大のドングリを拾った学校の先生が、素朴な疑問をフィールドワークを通じて解き明かしていきます。たくさんのイラストも本書の特徴です。

3　土器や土偶にどんなものがあるのか、ざっと見てみたい

●『国宝　土偶展』（文化庁・東京国立博物館・NHK・NHK プロモーション編、2009 年）

平成 21 年（2009 年）の大英博物館"The Power of Dogu"は大評判でした。帰国後に東京国立博物館でも『国宝　土偶展』が開催されました。本書はその時の図録で、造形的に優れた、そして迫力のある土偶を一気にご覧いただけます。大英博物館の図録は当然すべてが英語ですので、「日本語で読みたい!」という方は本書をご覧ください。

●『縄文土器ガイドブック』（井口直司著、新泉社、2012 年）

ここのところ話題に上ることが多い土偶については、『はじめての土偶』や『国宝　土偶展』で十分に見た、だから今度は土器を見てみたい、そんな方には本書をおすすめします。

●『掌（てのひら）の縄文』　（港千尋著、羽鳥書店、2012 年）

今でこそ、土器や土偶は博物館でケース内に収められていますが、製作した縄文時代の人々にとっては、実際に手に持って使うものでした。そんな感覚を伝えてくれるのがこの写真集です。土器の大きさや人に抱かれるとどういう感じなのか、ということを知りたい方は本書をご覧ください。

●『土偶界へようこそ』（譽田亜紀子著、山川出版社、2017 年）

一体一体が地域性や時代性を表している土偶。これまで様々な新聞で土偶の世界（土偶界）を紹介してきた筆者が、70 体の土偶を解説しています。普段、正面からでしか見ることのない土偶を様々な角度から眺められる貴重な一冊です。

4　縄文時代について知りたい

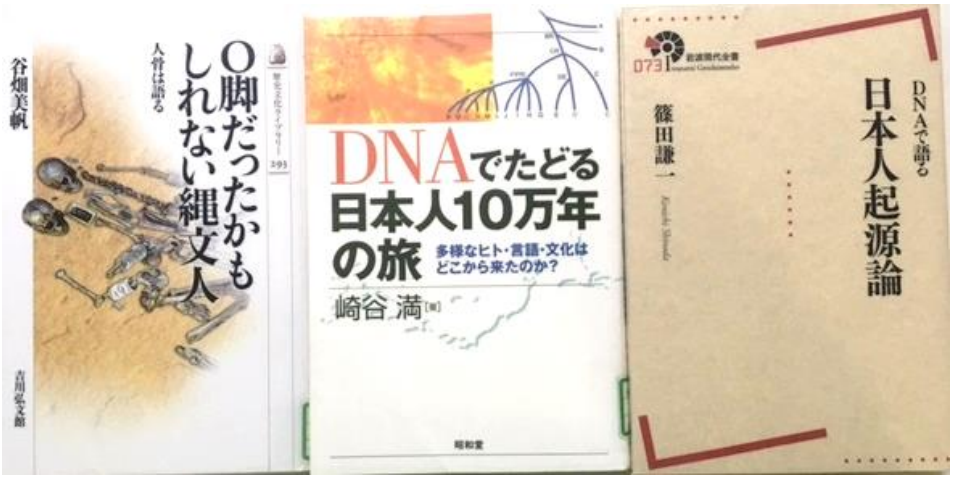
●『信州の縄文時代が実はすごかったという本』（藤森英二著、信濃毎日新聞社、2017年）

長野県が縄文文化の核地域のひとつ、というのは研究者には有名な話ですが、これまで縄文時代に特に関心を持たなかったという人にもそのことがよく伝わるのでは?　と思わせる内容です。豊富な写真が見やすいレイアウトで、とても親しみやすい内容になっています。当館所蔵資料や棚畑遺跡の出土状況もたくさん掲載されています。

●『知られざる縄文ライフ』（譽田亜紀子著、武藤康弘監修、誠文堂新光社、2017 年）

縄文時代の人々は、どんな生活をしていたのだろうか・・・?なかなかイメージが湧かないというあなたにぴったりの一冊。丁寧な解説とイラストで縄文人の一生を楽しく気軽に学べること間違いなしです!

5　縄文時代人について知りたい



●『O 脚だったかもしれない縄文人』（谷畑美帆著、吉川弘文館、2010 年）

近年の研究は、遺跡から見つかる人骨から、病気やけが、縄文時代の人々がどのようなものを食べていたのか、といったことまで分析できるようになってきました。本書では、縄文時代の食べ物や自然環境にも触れながら、縄文時代の遺跡から出土人骨から見えてくるさまざまな疾病（虫歯やガン、さらには要介護の人骨など）を紹介しています。そのなかで、O 脚についても触れています。

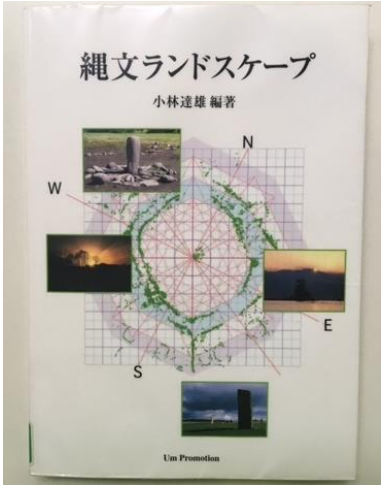
●『DNA 語る日本人起源論』（篠田謙一著、岩波書店、2015 年）

私たちはどこから来たのか。哲学か!と思うかもしれませんが、程度の差こそあれ、気にしたことがある人も多いのではないでしょうか。本書は、主に母系遺伝の DNA を対象に、現代日本人の DNA と縄文時代の遺跡から見つかった人骨から取り出すのに成功した DNA の分析から、今日の日本人の成り立ちに迫ります。

●『DNA でたどる日本人 10 万年の旅』（崎谷満著、昭和堂、2007 年）

『DNA で語る日本人起源論』は母系遺伝の DNA を対象にしていますが、本書は父系遺伝である Y 染色体から、日本人の起源を語ります。

6　その他



●『八ヶ岳の三万年』（小泉袈裟勝著、法政大学出版局、1987 年）

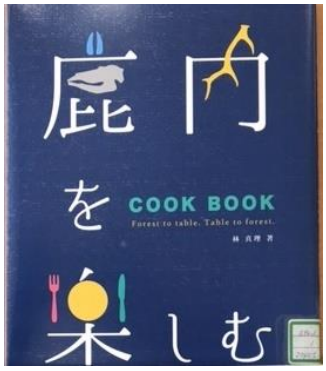
霧ヶ峰から八ヶ岳にかけては、黒曜石の産地として知られていますが、そのうちの八ヶ岳の黒曜石原産地を実際に歩いて調べたフィールドワークのルポルタージュです。

●『日本の土　地質学が明かす黒土と縄文文化』（山野井徹著、築地書館、2015 年）

縄文文化は黒色土、いわゆるクロボク土に育まれた、と言われてきました。本書ではこのクロボク土の正体に地質学から迫ります。その正体を突き止めるために各地でフィールドワークを実施、クロボク土だけでなく、「赤土」と呼ばれてきたローム層の実態をも明らかにしながら、クロボク土と縄文文化の密接不可分の関係を説きます。

●『縄文ランドスケープ』（小林達雄編著、アム・プロモーション、2005 年）

特別史跡の大湯環状列石は、壮大な縄文時代のストーンサークルの姿を私たちに伝えてくれます。では、それは何だったのか?という問いに、各地で発見された同じようなモニュメント遺構から考えます。



●『鹿肉を楽しむ COOK BOOK』

（林真理著、吉村美紀監修、横山真弓執筆協力、丸善プラネット、2016 年）

縄文時代の二大食肉、鹿肉と猪肉。近年ではジビエ料理として注目を集めることも増えてきました。本書は、スープ、パイ、中華、和食など、思わず「食べたい!」と色めき立ってしまうおいしそうな写真で鹿肉ジビエを紹介。詳しいレシピに加え、鹿肉の栄養価や部位ごとの特徴、入手方法も紹介する内容になっています。

●『ことばの起源　猿の毛づくろい、人のゴシップ』

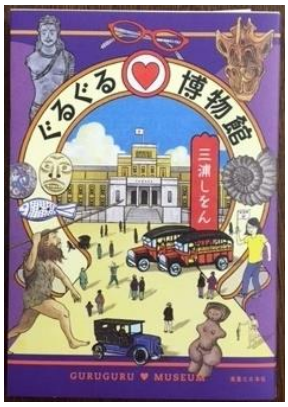
（ロビン・ダンバー著、松浦俊輔・服部清美訳、青土社、1998 年、2016 年新装版）

ヒトに特有のコミュニケーションツールである「ことば」。本書は、人類学者の著者がゲラダヒヒ観察のフィールドワークをもとに、「ことば」の生まれた背景を考えます。そのカギがサルのあいだで仲間との結びつきを強める毛づくろいと、そして大脳新皮質の大きさが群れにいるサルの数の多さを決める（かもしれない）という比例関係です。そこから導かれた説は、脳が体のサイズに対して異常に大きいヒトの場合、群れに属するヒトの数も多すぎて、コミュニケーションに費やす時間を短くせざるを得なかったがゆえに、毛づくろいに代わって「ことば」が発達した、というもの。

●『老人と子供の考古学』（山田康弘著、吉川弘文館、2014 年）

縄文といえば思い浮かぶ土器や土偶は、それを作り使った人々の姿を教えてくれるわけではありません。人々の姿は人そのものであった骨に見出すことができます。そしてもっとも骨が出土する場所、それはお墓です。本書は、その人骨から縄文時代の(1)子ども、(2)イヌ、(3)老人を論じます。「縄文時代の子どもがどのように埋葬されているか」という観点から、子どもの社会的な立ち位置を成長段階ごとに紹介したり、同様に「老人」についても論じます。

7　土偶や土器はどこで見られるの?　遺跡や博物館に行きたい!



●『土偶手帖』（譽田亜紀子著、世界文化社、2014 年）

あの土偶、この土偶。なかなか一堂に会した展覧会はありません。「じゃあいっそこっちから出かけて行っちゃう?」、そんな人にはこの一冊。どの土偶がどこの博物館に展示されているのか、パッとわかります（スマホより早い!）。片手サイズなのもうれしいです。巻末には当館や八戸市の博物館周辺のおすすめスポットのガイドもあります。

●『ぐるぐる博物館』（三浦しをん著、実業之日本社、2017 年）

博物館というところは、ある意味で収集癖が具体化した究極の空間でもあります。好きな人にしかわからないコレクションの展示は、好きじゃない人を遠ざけるマニアックなものでもありますが、だからこそほかでは体験できない味わいもあります。そんな博物館でもさらに厳選されたところを作家の三浦しをんさんが訪ねます。

●　『土偶のリアル』（譽田亜紀子著、武藤康弘監修、山川出版社、2017 年）

考古学には、程度の差はあれ、発見の物語があります。ドラマティックだったりコミカルだったり、さまざまな物語が関係した人に忘れることのできない記憶として刻みこまれていきます。

本書は、土偶にまつわるそんな物語を集めたものです。単に発掘物語に終わらない「発掘担当者あるある」にも触れることができる内容で、発見当時を追体験できるようなドキュメンタリーです。 本書を参考に遺跡のあったところへ出かけてみるのはいかがでしょうか。